



その日もほくは、ミニチュアダックスフンドのブンをつれて、近くの児童公園までさんぽにでかけた。

カレンダーではもう秋だけれど、ちよつと歩いただけでせなかにあせが流れる。

木かげのベンチにすわったほくは、ブンのリードをはずした。

「ひとりで走ってこい」

ほんとは、そんなことしちゃいけないんだけどね。公園にだれもないときは、こうしてときどきブンを思いっきり走らせる。ブンは、いつも公園をグルグルと走りまわって、まんぞくすると、もどってくる。

ところが、その日のブンは、公園のすみまで一直線に走って、はげしくほえた。

ほくは、ベンチから立ち上がった。

「どうした？ ブン」

すると、ブンは、キャンッ！ と、悲鳴のような声をあげて、こっちににげてきた。

ブンのうしろから、なにかが来る。

「なんだ、あれ？」

目をこらしてよく見ないとわからないけど、とうめいで、なんだかユラユラしている丸いもの。大きなシャボン玉みたいだ。だけど、あんなに大きなシャボン玉、見たことない。運動会で使った大玉ころがしの玉よりも、ちよつと大きい。小さくはずんでころがりながらブンをおいかけている。

シャボン玉からは、ピヤンポピヤンポとふしぎな音が聞